

ある。さきにはぼくは転回といったが、これは転回ではない。ジグザグである。二律背反的である。

ぼくには中本氏をアナキストと断言する根拠はない。ないがしかし、くり返しているように至近距離にいたこともあると見るのは不当ではなからう。

そこでわからなくなるのだ。

アナキズム、またアナキストやそれに近縁な人々にとって、天皇制とか皇室とか皇族とかは何なのか？ということが。

もちろん、ぼくはすべてのアナキストやそれに近縁な人々に対して一様な疑問を抱いているのではない。

代表的には石川三四郎、「天皇ヒューマニズム」を唱えなどしてはつきりと右翼に転じた菊岡久利、「大御親

大阪の「カラケシ騒動」

河本乾次

「カラケシ騒動」、この奇妙な名称の事件は、大阪のことならどんなことでも精通している物識り仲間でも、いぶかしく首をかしげることであろう。この事件を「カラケシ騒動」と名づけることは当を得ていないかも知れぬが、架空の

神の心もて凝視めて立てるを見よや」と死の直前の作品を結んだ萩原恭次郎。これらの人々のことをぼくは思うのだ。

疑問を抱きながら、ぼくは自分の接した石川さんの人柄にいつもなつかしきを感じているし、菊岡久利、萩原恭次郎はそれぞれ好きな詩人として読み返している。

だから一層わからなくなる、ということでもある。その、平常のわからなさを、偶然手にできた中本氏の『選集』をとぼくちに書いてみたので、これは中本氏には不愉快な文章かも知れない。けれども幸いにして中本氏が健在なら、不愉快は不愉快として、ぼくが疑問としていることに答えていただけるとありがたい。

おねがいします。

(七四・五・一三)

物語でなく、実際に発生したことである。遺憾なことには、この事件発生の確実な年月日、関係者の人名、肝心の内容、経過の記録ノートを紛失して終っているの、具体的に記述できないことになっている。また、「イオム」誌に載せる以上、アナキズム運動との関連を問われると、これもまた証拠立てるものがなく、かつての関西のアナキズム運動の中で、この事件が記録されておらず、未だに埋れていることになる。

そこで、これを発掘し、詳細に知る手段は残されてい

る。この事件の発生の所轄の築港警察署には記録は残されておらず、この事件に、重要な関係の神戸の第三十八銀行にも、当然、報告書類が残されていることである。この方面から調査を進めてゆけば明日となる。残念にも本文では、そこまでは未調査になっている。

そもそも、この事件のプロローグとして、左の話から書き始めよう。

この話は、昭和七年前後の、当時の新聞には報じられていたので、すでに一般周知のことであるが、大阪市内の河川、特に、淀川筋から、安治川、木津川にかけて、小舟に乗って、流木を拾い集める人達があった。主として沖繩出身者であった。船舶の航行に妨害している流木を頼まれもせずに、河川の清掃に従事していることになって、大阪市当局は、その勤勞奉仕的な行為に感謝したのであった。この流木拾いの集団は、別に、河川清掃の奉仕が目的でなく、自分たちの生活手段から出発したものであった。拾い集めた流木を資材にして、これを焼いてカラケシの製造販売したのであった。流木だけでなく、古い家をこわしたものの、火事で焼跡の廃材などを安い値で買い集めてカラケシ製造の資材に活用した。

バラックの家屋が百戸余り建ち、その家族を含めて二百余名の人口を有す一部落が形成された。土地所有者の銀行と正式に、土地賃借を取り交したわけでもなく、無断の不法占拠なれど、銀行側も差しあたり必要な土地でなかったもので、善意的に黙認の形であった。いつしか郵便局まで、この部落を認めて、福崎町の宛名で郵便物は配達された。さらに、市、府会議員にとって、この部落を掌握することによって、まとまった投票数を得る大栗田地区となつて、何かと有利な相談に乗ってくれたのであった。

夕方になると、福崎町の数個のカラケシ炭焼き窯に火がつけられ、そこからハキ出す煙が、築港付近の人家の軒をはつうて、もやのように低く立ちこめ、夕闇せまるどきのこの風景は、築港名物の一つになっていた。この煙りは、当時、市民側からは公害苦情の声は出なかったようである。

ところが、昭和八年に入って何月であったか月日は不明、突然に、これこそカラケシ炭焼き部落にとっては寝耳の水であった、銀行から土地明け渡し、立ち退き要求が伝えられた。これには期限の余裕なく即時立退きであった。加えて警察から炭焼き窯の使用の中止を命じてき

当時（昭和初期）の市民生活の燃料事情は今日ほど、電気、ガス、石油、プロパンを、簡便に使用できるまで、家庭の経済事情は向上していなかった。一般市民の大半は、カンテキで炭火の利用が多く、これに火種のカラケシが必要とされた。この需要に目をつけてカラケシ製造に取組んだのが、大阪在住の沖繩出身者であった。当時の社会状況は、沖繩労働者の工場での賃金は、差別がひどく低賃金であったので、工場労働者では生活の安定は計れなかった。窮余の一策から他に収入の道を求めて、カラケシ製造という新商売を編み出したわけである。

このカラケシが、市民生活に便利で、安価で、調法がられ、益々繁盛し、最初にやり始めた人は、忽ちの間に、数万円の貯蓄ができて、工場労働者の収入をひき離れた。この噂が伝えられると工場労働者から転進して、カラケシ製造者の数も雪ダルマ式に増え始めたのである。

大阪港区の福崎町といえば、昭和七、八年頃は、広漠たる荒地で人間の住める場所でなかった。低地の湿地地帯で、満潮どきや、高潮のときは、常時、海水が流れこみ、土地一面は水浸しになった。所有主の神戸の第三十八銀行は将来を見込で放置されていた。この悪条件を好条件として、カラケシ製造の炭焼き窯の設置には格好の地点となつて、沖繩出身者が集り移住し、忽ちにして、

た。その理由は明かでない。同時に、何者かの手によつて窯の数個は破壊されていたという緊急事態が生じた。さらに、部落に資材を運びこむ運搬船に利用されていた入堀の川岸口を、どこからか傭われた暴力団の組の者に閉鎖、監視されて、ここから一切の出入は禁止されてしまった。これを排除するには、暴力団との衝突で、相当な犠牲者を出さなければならなかった。

最初、市、府会議員の有力者は、自分の選挙地盤のできごとなので、その投票地区を失つてはと、その調停に乗り出して来たが、形勢不利とみて姿を見せなくなった。なぜこのように手を引くにいったか、また、当時のマスコミも、この記事の発表をさしひかえたことは、この事件は、単なる銀行からの立ち退き問題でないことを意味した。この立ち退きの発火点は、銀行や警察ではなく、全然、表面に名が出さずにかくされていた当時の軍部にあったのである。

いわゆる昭和六年九月に柳条溝事件が発生し、満州事変が勃発した。その戦火は拡大して、昭和七年には、上海事変に飛火した。昭和八年は、支那事変は益々エスカレートして、戦争過熱期に突入したのであった。

当時の大阪は、築港棧橋から戦地行の夥しい兵器を積み出す輸送船の発着港であった。この船に運ぶ軍用貨物

列車が、天王寺駅から築港え通ず臨港貨物線を、昼間は避けて、夜間のみ走ることになった。この夜間運行の軍用列車の運転を妨害したのは、思いがけない福崎町のカラケン炭焼きの煙によって、信号灯を曇らせて、安全運転を確認することができなかったのであった。相手は軍部である。なんの用赦もない、こと簡単である。戦争遂行を防げるもの、国賊である。直ちに、カラケン炭焼き部落を撤去せよとの、きつい命令は、銀行と所轄警察署をあわてさせた。

この事件は、今でこそ軍部の命令だと言えるが、当時は、これを表面に出すことはできない、新聞も、この事件の真相を明かに発表すれば、兵器の軍用貨物列車の動きをスパイすることになって、慎重な態度をとって記事にしなかつたようである。

一方、カラケン炭焼き部落にとっては、軍部には勝算のないことは知っていても、住居と収入を失う生活の死活問題に直面しているの、そう簡単に提示された少額の立ち退き金額で納得するわけにゆかず、調停者の市・府会議員には逃げられて、部落だけの力では弱く、当時の沖繩人の社会的発言力は軽視されがちな差別のあった時代で、そこに外部からの協力者が必要であった。

当時、泉州地方の小工場に働く沖繩出身労働者が加盟

ると、この事件は、急速に一変して、警察提示の条件で、むしろ圧力によって立ち退き問題はすでに解決して終っていた。

警察から出てきた池田とKに、炭焼き部落の責任者が「御苦労でした、無事解決いたしましたから御引きとり下さい」と、いと丁寧な御礼の言葉だけ頂戴して、この事件は、これであっけなく終幕を告げたのである。どの

無政府主義者の演説会

杉藤 二郎

福岡県の端し、熊本県寄りに筑後福島市がある。その近くの山間に田形（たがた）という字がある。ここは七十戸ばかりの小さい部落であったが、それも昔の話で、今は大いに発展している。

私がこの地を訪れたのは、その公民館長から頼まれたからであった。館長は平島忠太郎と言ひ、なかなかの人気者であった。

この部落は半分を上（かみ）田形、半分を下田形と呼んだ。上田形の三十五、六戸は、天皇中心主義の菊旗会、下田形は共産党に牛耳られていた。ここでは部落に引く

している大阪府泉州郡佐野町（現在佐野市）に事務所を持つ、自由連合系の「泉州紡績労働組合」（責任者池田一夫）があった。この組合え、カラケン炭焼き部落から協力支援の申し込みを受けた。責任者の池田は、銀行相手の立ち退き問題の交渉と気軽に引き受けて、現場に行ってみると、意外にも、その背景は軍部で、警察の態度も強硬。事件は泥沼にはまりこんで、今にも、立ち退かなかったら焼き払う強行手段を執りかねないまで悪化していた。この重大さに驚き、急遽に、岸和田市春木町に事務所を持つ自由聯合孫の「南海一般労働組合」のKのところへ応援を求めた。

池田とKと協議の結果、この事件の情勢分析の結論は悲観的であったが、いままら手を引くわけにはゆかない、やれるところまでやってみようとなり、警察署と銀行え交渉の活動を開始した。銀行側も同情的になって立ち退き期間をゆるめてきて移転先をゆっくり探すことができた。これに反して警察側は緩慢な状況に変化したことにあわてて、軍部からの督促もあって、奇妙な流言を飛ばし始めた。それはアナキストの集団が、この事件で神戸の第三十八銀行を襲撃する計画をしているというデマであった。池田とKは、この嫌疑で築港警察署に五日間留置され取調べを受けた。無実の検束は解かれて釈放され

ような条件で解決したかは報告されず、第三者には不明のまゝである。

今から、ふりかえってみて、これが、沖繩人の大阪での戦争犠牲の第一号ではなからうか。

これ以上の内容の経過を知るには、特志家の手で、銀行関係から調査、資料発掘、取材を待つのみ。

灌漑水のこと、何時も上と下に分かれケンカの絶え間がなく、怪我人を常に出していたので、平島公民館長は、何とか仲直りをさせようと努力したが、ついにそれもならず、話し合いの上部落を真二つに分けることになった。しかし、そこにもまた争いが起きた。何しろ、個人個人の付合いがあり、そう簡単には分けられない。その上姻戚が入組んで、一層事を大きくしてしまった。平島も遂に投げ出してしまった。こんな話を私のところへ持ち込んできたのだ。私は困ったが、第三者の話を聞かせてはということになり、副島、井原、御嶺（みはた）、池田達をつれて、前と後に看板をかけ、所謂サンドウィッチマン・スタイルで乗り込んだ。

先づ部落内を大きな声で怒鳴りちらし、各家の門戸を開かせた。時に、一九六八年春まだ浅き頃である。公民館に集った頭数は、ざっと四十人。集りはまずまずの成

功であった。第一番手には、若い連中の中から池田が立って、無政府主義だけがこの世を治める政治だと叫んだように記憶している。御幟が続き無政府万能を叫んだが聴衆には訳が解せないようであった。若い連中が終ると、今度は井原が壇上に上り、四次元の世界について話し、杉藤は、労働と労働者、労働者運動でなければいけないと結んだ。最後に副島が立って何を話したか記憶がない。副島が立つ頃には二人、三人と聞く者もへりはじめていた。館長がどんなにとめても流れ出した群衆は止めるこ

日本人と朝鮮人のあいだ

—— 政治的視点と人民的視点 ——

高島 洋

先日、夜中の二時ごろラヂオを聞いていたら、歴史的な日本と朝鮮の關係についての解説のようなものを聞いた。それによると、日本の陶磁器のほとんどが朝鮮に源を發したものだといふのである。その理由は秀吉の朝鮮進改の際に侵略戦争を進めながら一方で朝鮮の陶工をさがし求めて逮捕し、各大名が夫々陶工を日本に連れかえ

とが出来ず、副島は腹を立てていた。

我々は帰る時も、プラカードを掛けたまゝで、汽車、電車を乗りついで家に帰った。

その事があって以来、直方（福岡筑豊）佐賀、福岡、富村など、方々で無政府講演会と銘打った演説会を開いた。辯士はいつも同じ顔ぶれの同じ出立ちであった。そしていつの場合も、タオルとちり紙だけは忘れず携行した。

って製作させたのがそのはじまりだというものである。従って島津候は陶工某を、何々候は某をと人名まで明確に述べていた。その際、朝鮮の需学者も連行され、徳川幕府に重用されたのが後に江戸需学として開花したものであるという。それまで日本には仏教は有していたが需学は存在していなかったとし、それを証明するものとして、現在韓国にない朝鮮語による需学書が、江戸幕府に残っていたというものである。

それから数日して、はからずも商業新聞の読者欄が神戸の武田芳一氏（齒科医）（たしか私が詩誌クラルテに参加していたころ面識のあった作家の武田氏ではないかとおもわれる）がNHKの外国語講座に朝鮮語を加えよ

という主張のなかで次のような文章をかかれていた。

「日本文化の源流は朝鮮です。神社のシメナワやヒモロギの神事は朝鮮の風習に残っています。昔、新羅や百済の文化がどれほど日本に寄与したか。奈良に残る文化遺産のほとんどが向うのものか、帰化人がつくったものか。飛鳥、天平の建物のほとんどが朝鮮式です。朝鮮は異国ではない。いまの日本人も三分の一は朝鮮が祖国になり母国ということになる。その朝鮮語に内包する文化は日本と同一でないのか。古朝鮮語と古日本語は同じではなかったか。万葉語と古朝鮮語はどのくらいに変貌しているのか。朝鮮語は日本歴史を知る必須の外国語である」

これらを通聞して感じたのは意外な程日本民族と朝鮮民族の歴史上の親近さと相当部分は同民族であったといふことが実証されつつあることである。過去においてこのような両民族の親近さをおおいかくし、侵略、侮蔑、差別、対立感、にくしみの連続であったことは国家観念による現実主義の至すところであろう。今日なお日韓人民のあいだには日韓の關係を見るに当って、政治的な視点でしか見ない人々が多い。政治的視点というものは、國家の利害關係に執着し、それに左右されて物事の本質を見失うおそれが多分にある。たとえば最近日韓もし戦

えば日本の軍力は韓国の軍力に敗北するであろうと

いった流言がながされたり、一方最近の金大中事件や日本人起訴事件に見られるように田中内閣と朴政権の癒着ぶりが次第に露骨になりつつある勿論これはアメリカを軸とする資本体制の維持という命題が彼らにあるからである。そして先程の軍事力の問題と一見反するように見えるながら國家のその時々の方針でわれわれ人民が動かされている現象に外ならない。更に言うならばたとえ中ソ關係にしても、同じ社会主義國を標榜しながら、ひと度國家間の利害關係となると角をつき合せている。そこには眞の社会主義精神は失われ、一國社会主義に墮落してゆく道しか残されていない。われわれ人民は、このように國家権力者の設定する窓口で物事を見ていては誤ちをくり返すばかりである。日韓の人民は自身のみで人民的立場で、すべてのことを見なければならぬ。日韓両民族の血肉を分けた昔の親近さを國家間の駈引にされ、犠牲になることだけは絶対拒否しなければならぬ。それにしても朝鮮の文化奪略者であり、今日では享受者である日本人民は、取敢ず歴史的な両民族の關係を更に深く調べてゆく必要に迫られているのであるまいか。

大阪印刷工組合余話

和田 栄太郎

印刷工と酒

大阪印刷工組合は初期のころ賀川豊彦さんが顧問をしていたようだ。私の記憶に残るそのころの組合の中心的人物は矢野準三郎君とか、また若い人では安芸盛という人があった。この人は後に総同盟から組合評議会の活動家となり故郷から衆議院に立候補したりなどしたが若くして亡くなった。そのころ私はこの人から賀川さんの書いたものだという一冊のパンフレットを見せられたことを覚えていて、このパンフレットが妙に私の記憶に残っているのは、そこに書かれていた、いかにもクリスチャンらしい賀川さんの考え方である。「労働者と飲酒」たしか薄っぺらなガリ版刷のパンフレットの標題はそう書かれていたようだ。そしてその内容は私の記憶に間違いないならば次のようなものだ。

……労働者の集まりという大抵時刻に始まるものだが、印刷工の人たちの場合は違うようだ。一時間ぐら

いも遅れる場合もある。そして遅れて来る人たちは、ほとんどが酒気を帯びている。別にそのため騒ぐということはないが、大切な会議の始まるころになると眠ってしまふから困る。これについて考えてみたんだが、印刷という仕事は他の産業と違って残業が非常に多い。しかもこの残業から得る賃銀は生活費の中の可なり重要なものとなっている。だからたまに定時で会社を出ると一杯飲みたくなるものらしい。これがひとつの習性のようになっているのではなかるうか。しかし、これは大変なことだ。どうしても昼間の賃銀だけで生活のできる状態にしなければ人間性は回復しない。酒を飲むことを責める前に運動の目標をハッキリさせるべきだ。

賀川さんの考え方は大体このようなものだったが、このおよそ五十年ほどの昔に賀川さんの考えたことが、現在の時点にも妥当するものであることはいうまでもあるまい。

新聞ゼネスト余聞

前号の「まぼろしの新聞スト」について、大阪に関係

のあるエピソードがある。それを書き落していたから追加する。

大正八年の新聞ストが一応終結してから各社とも一様に労務対策のようなものの検討に入ったらしい。その中でも滑稽なのは報知新聞の工務の連中だった。彼等は東京の連中は気が荒いから」とかなんとか理屈をつけて大阪から十人ほどの文撰の人たちを連れて来た。大阪の人たちを随分バカにした話だが、彼等にすればこの大阪から来た人々は東京の人たちへの牽制策として十分役に立

これは雑記と呼ぶしかない
呼びようがない

戸田 広介

私は何を書こうかと迷っている。

……日曜日の午後、私はちいさな劇場のなかにいた。むし暑さと濁った薄闇が私をつつんでいた。

劇場の外には緑まぶしい初夏の木立ちがあった。そし

つと思っただけだ。私が覚えているのは久徳正憲、伏下六郎、生島繁、小寺という人たちだったが、後から北浦千太郎が加わった。ところが皮肉なことに、この人たちが大正九年の争議の中心となってこれに東京の布留川桂君が加わって例のケース転覆事件が勃発する訳だ。しかもこれらの人たちが東京刑務所に収監されると第二陣として会社側との交渉に当たったのも大阪から来た人たちだった。会社側の甘い考えも労働者の連帯感念の前には何の役にも立たなかつたという次第である。

ここには濁った薄闇。私は——そのどちらの場所にも身を置くことができる、自分の意志で。そうしようと思えば、光を浴びつつ公園の木立ちの間を散策できるのだ。しかしそうはせず、私はいま薄闇のなかへみずから閉じこめている。何故だろうか？ 理由など見出し得ないのだ、私はこういうしかない——おそらくはほんのちいさな偶然、その時の気分・趣向にしたがって私はここへ来た。

……だが座席に身をおきながら、この薄闇と戸外との対照が意識の片隅にあり、私は落着きを失い、不安な心持になっていく……。

正面のスクリーンには影が生れ、動き、消滅し、別の影が生れ、流れつづけていた。私はそれらを見つめていた。私が観ていたのはサタジット・レイの『大地のうた』だ。一人の観客である私は、その三部作の映画のためにほぼ六時間、固い椅子に拘束されていた。

……サタジット・レイ。このインドの映画、詩人は確信にみちて悠々と、自然を、そして自然の一部である人間たちを描いていく。彼の確信とはこうだ——水は水である。樹は樹である。他のものに置換えることはできない。それらは固有の力強さでそこに存在し、呼吸し、かがやきつづけている。それで十全なのだ。それ以上に必要というのか。

——あれは三部作のうちの、どの個所だったろうか。ベンガルの野をたたきつけるような風雨の去ったあと、森の樹の葉末から水滴がきらめきつづいた。それが池の水面に波紋をえがき、静まってく。やがてミズスマシがどこからかあらわれて、その上をすべっていく。それは、息をのむような美しさだった、私が現実世界でごくたまに出会う瞬間のように。

さらに、水や樹や河とおなじように、地上のある場所にそっと置かれた人間。揺りカゴの中でねむっている赤ん坊も、軒下において歯のぬけた口で果物を食べている老

にあるのは対称への愛情である)の大切さを教えられたのは、この四月に出たばかりの一冊の本によってである。ジョナス・メカス著『メカスの映画日記』。リトアニア生れの映画批評家、六〇年代のアメリカ前衛映画運動の中心にあった者。私は共感しつつ一気に読んだ。随所に赤鉛筆で印をつけておいた。ここに引用して、紹介したい部分がある。その全部を引用出来ないのが残念だ。メカスの発言は多岐にわたっているが、その根底にはいつも一つの視点があるように思う。彼はある実験映画についてのべる。「この芸術は、芸術に対する新しい態度から生まれた。言いかえると、人生に対する新しい態度から生まれた」芸術の革命と人生の革命が分離し得ないものだという当然の命題が、芸術と人生の先馳者であるメカスのことばの下から出てくると、驚くほど発刺としたものとなる。実はそれほどわれわれの内と外に古いものが残っているというべきだろう。「新しい映画は新しい人間からしか生まれえない」)

私は非妥協的な自由の精神と出合う。自由の精神とは、このようなものである。「美は、われわれを自分自身の存在に目ざめさせ、われわれ(われわれの魂、存在、魂そのもの)を美しくする働きをする」。「なぜ、醜悪さには醜悪さで、愚鈍さには愚鈍さで戦い、いっそうそれ

婆も、いまその家の中庭を横切っていく一匹の犬と同等の存在である。実際、両者のあいだにどのようなへだたり、どんな優劣があるというのか。いかなる特権も持たずそこに裸で投げだされていること——そのことによつて、老婆も赤ん坊もそれ以外の人間も、それぞれの固有の生の軌跡のうちにあり、生気にあふれ、美しいのだ。

ところで、『大地のうた』という映画はいったい何だったのだろうか？ 何が描かれていたのだろうか？ 私たちにわかるのは、主人公が生れ、幼少年から青年へと成長し(その過程で祖母・姉・父と死んでいき、死は波のように彼の周囲にうねっている)、やがて結婚して子供が生れる(そして引きかえに妻が死ぬ)というそれだけ、生と死のくりかえし、それだけである。ここでは一九三〇年代の英植民地インドの現実側面は切りすてられている。だがそれがどうだというのか。二次的な問題にすぎないではないか。そんなことはどうでもいい。それよりも、先の問題にもどつて……この映画はいったい何だったのだろうか、余体として。私は軽々しくいえない。私はこの作品を一度観ただけだ。一度だけでは不十分という気がする。くりかえし観て、もっとさまざまな発見を試みたい。

一つの作品をていねいに観、判断すること(その根底

らを強調してみせようとするのか？ なぜ、美しいものを創って醜悪さと戦おうとしないのか？」自由の精神とは、このようなものである。「人間の内部で起こることは何であれ、すべて美しい。その見方さえ知っていれば」「外側からは人間を変えたり、改心させたり、救済したりはできない。真の作業は内部でなされる。他人とは、自分のやさしきさによつてのみ通じ合える。『世界の変革』によつて人間性を守ることができない。どのような変革もすべて五十歩百歩で、欠点だらけである」。

そして、「平凡な、生気のない、形式的な映画からの離脱はすべて健康なものである。われわれは、たとえ完璧ではなくとも、より自由な映画を求めている。——古い世代には望むべくもないが——若い映画作家だけでも荒々しく、アナキーに自分の殻を打ち破り、真に脱皮していけばよいのだ」)

もうやめておこう。冒頭の話にもどろう。映画の合間、私はロビーへ出て、ボンヤリと壁にもたれていた。目の前にガラスのドアがあり、そのむこうに公園の石だたみと緑の木立ちがあった。噴水の水が陽光にきらめいていた。木立ちが風にそよいでいるのに、私は風を感じない。太陽の熱も、木の葉のにおいも。巨大なガラスがそれら

をさえぎっているのだ。私は不思議でしようがない。私は何故ここにいるのだろうか。あの石だたみに立たず、このロビーに身を置いているのだろうか。ほんのちいさな偶

ヨーロッパの旅 (4)

ローザンヌからミラノへ

平山 房子

ゆるやかな斜面の広い通りに沿ってその家は立っている。C・I・R・A (アナキズム国際研究センター) である。実質的にこの研究所の運営者であるマリー・クリスチヌが我々を出迎えてくれた。五十すぎとは思えぬ若々しさで笑顔の美しい魅力的な女性である。マリーが自宅を利用して設置したこのセンターには、世界各地で発刊されるアナキズムに関する文献、資料が蒐集された貴重な図書館がある。したがってこの家には世界中からの訪問者の絶えることがない。そこで顔を合せた者達は、それぞれの研究報告や意見を交換して互いの連帯を深め合うのだった。

然・その時の気分といいながら、やはり不思議でしようがない。

しかし、ここに集って来る人々にとつての最大の魅力は、誰もが受ける一種の「やすらぎ」であろう。どこかを旅してここに立寄った時、ホッとしたくつろぎを人々は見出すのである。それはマリーの明るい開放的な人柄と卓越した語学力、必要以上に親切を押しつけない洗練された接客法に大いに預っていると思われる。彼女の夫は亡命ブルガリア人である。ここローザンヌに居住しているも、何時迄も東欧の土臭さを失くさない好人物である。太い眉、ずんぐりした赤鼻、酒もタバコも決してたしなまず、自然をこよなく愛し、庭師として暮している。この七月初旬、何の前ぶれもなくA・O・Aのポーラトン夫妻とここを訪づれた時、私を一目見るなり『突然ここに日本人現われる。そも何事ぞ』といって私を笑わせる様なユーモアも持合せている。ついでにいうなら、この時の訪問は私の意志からではなく、ポーラトンのお伴でというより、ポーラトンが私を伴うことによつて、初めてC・I・R・A訪問を実現したといういきさつがあつて、胸に秘めたそれぞれの心の動きを察してのマリー

の夫の発言であつたのかもしれない。

さて、七月二十三日、この日のローザンヌは、午後から急速に天候が悪くなり、すっかり灰色に変わった空からは、風まじりのこぬか雨さえ降り出した。真夏だというのに、セーターが欲しかった。だが家の中は陽気であつた。この日はトリノの若い二人の同志、そしてオランダから妻と娘を伴って滞在中のバス・モレル、京都の学生だという三木君、といった人々と出合った。私の連れは、バス・モレルと意気投合し、すっかり夢中で話し込んでいた。フランコとジャネットはモレル夫人と娘さんが始めたゲームに加わり、夜更け迄興じていた。アルフレッドは、日がな一日、図書室の長椅子の上に大きな図体をはみ出す様に眠り続けていた。それでも食事時になると不思議な様に正確に食堂に姿を現わしたので、私の連れが「アルフレッド、君は喰うちや寝、喰うちや寝の男だよ」と冷かした。彼はすかさず「クチャネ／クチャネ」と真似て、どういふことかと尋ねる。「喰べては眠り、目が覚めると喰べ、腹が大きくなると又すぐ寝てしまふ。いつも喰べるか眠っているかしかしない男だということだ」という様な意味を説明すると、彼はすっかりその言葉が気に入ってしまった。それ以後、旅の間中、何かというと、クチャネ、クチャネ、を連発しては上機

嫌であつた。

シャトー・ジュ・ロワールの会議のこと、最近の日本の運動のことを我々はマリーと話し合ったが、イタリー旅行の帰途またここに立寄るといふことを約束して、翌朝、いとまを告げる気持も軽く我々はC・I・R・Aを出立した。アルフレッドとジャネットはもう一日滞まるというので、フランコだけが我々と同行した。

ローザンヌからミラノ迄の六時間の旅は、ずい分楽しかった。アルフレッドもジャネットも消えて、フランコと我々だけの旅だった。私は彼とむかい合っている二人の間の十年のきずなを感じた。水入らずの旅をしている気安さがあつた。彼も又、同じ想いの様だった。雪を頂くスイスの山々を窓外に見やり乍ら、我々の話題はつきることがなかった。食物の話、イタリーの古銭、小説から音楽と発展していった。とりわけ映画の話になつておどろいた。私達は年月・場所の差違こそあれ、申し合せた様に同じ映画を観ていた。そして同じ感激に浸っていたのだ。

通路を距だてた隣席のユーゴスラビヤ人の親子が話しかけて来て、美人の娘の方が、ジュースやたばこを我々に差出した。私は日本の千代紙でできた童人形のしおりを彼女にプレゼントして喜ばれた。ミラノが終着駅にな

るこの国際列車には、さすが、イタリイ人の乗客が最も、車内にもぎやかだった。

列車は、いつか長い長いトンネルの中を走っていた。国境である。前方の白っぽい光に気づき、やがてすつかりトンネルから抜け出した時、そして再び我々が陽光を見たとき、あゝ、イタリヤだった。太陽の輝きが丸で違うのだ。周囲の景色もすべて明るさを増し、それだけに埃りっぽさも感じられると、それは忽ち伝播の様に車内に陽気さを運びこんだ。人々は一段とにぎやかになった。ドモドンソラ駅で買った昼食のモルタデルラ・ソーセージに舌づつみをうち、美しいマジョーレ湖に見とれてる中に、列車は紙くづの散乱するミラノ中央駅の構内をゆっくりとプラットホームへと近づいた。三時五分であった。

ミラノ駅からすぐメトロに乗かえて我々はアウグスタ・ファプロの家に着いた。有名なドウオモ（大寺院）のそばを市街の中心街のアパルトマンの最上階に彼女は住んでいた。すでに五十才も越した年配で小太りの元気なおばさんだった。ごく庶民的な雰囲気であつた。我々を迎えてくれた。着いて間もなくこの狭い部屋に若い男女があふれた。四年前に殺されたミラノのアナキスト、ジュゼベ・ピネリの抗議デモが今夜行われるというので、そ

をポケットに引込め、フランコが自分の金を出して勘定をすませた。イタリヤ人は自国の紙幣さえも信用することが出来ないのかと思わぬところにイタリヤ経済と政治の弱体性を垣間見た思いだった。

翌日の午後、市の東部のヴィミニナレ通りに、リーナという同志を訪問した。私と同年輩位に思えるリーナはミラノ市を訪れる大勢の日本人観光団に非常に興味をもっていた。

「イタリヤ人がアジアの日本に旅行することは経済的時間的に大事業である。しかるにこんなに多くの日本人が、それも、若い旅行者を多く見かけるが、それは日本では、どんな階層の人々なのか？ 日本人はそれ程大金持なのか？ そして彼等は何故常にグループで行動するのか？」

と矢つぎばやに質問を浴びせられた。そこには単純に答えられない問題も含まれていた。狭い土壌にひしめき合っていて生きている人々が敗戦後も自由に国外に出られなかった時代から解放され、同時に経済大国と云われる様になった表面的現象に対しての大衆の日常生活のアンパランスぶり等を長い時間説明する羽目になってしまった。

リーナの家で思わぬ長居をした我々は、そこを辞して「リビスタA」の事務所を訪れた。殺風景な部屋に山と

の集会に出かける同志達であった。イタリヤ警察とファシストの自由主義者に対する弾圧の烈しきは近年とみにエスカレートしていて、血なまぐさい事件を方々で聞いていたので、私は、こわくはあったがそれ丈に興味深く出来たらデモに参加することを望んだが、皆なは危険だからとそれに反対して、ここに止まる様に云われフランスも又我々と一緒に残ることになった。アウグスタ夫人は紺のスーツ姿に帽子をかぶり手には買物袋をさげ「ちやあ、一寸行って来るからね」とマーケットに買物にでも行く様な気軽さで、連れの男女をうながし乍ら室を出ていった。

その夜はデモから帰ったアウグスタ達とレストランで、にぎやかな食事をした。おきまりの山盛りのスパゲッティから始まる長い夕食が終り、さて勘定というところで、若いジーノの差出した札をレストランの主人は手にとりしばらく眺めてから、この札は受取れないと返してよこした。彼が云うには、印刷の色が気に入らないというのである。口には出さないが、にせ札だったら困るというのだ。ジーノやフランコ達が交る交るその札を手にとり眺めたが別におかしいところもなさそうだった。ジーノ達はこの店の常連の様であったのに主人は断固として札を受けとることをこぼんだ。ジーノは仕方なく札

積まれた機関誌「エデトリスA」に埋まる様にして働いていたアントニオ、リアーナ、チェザレの三人が固い木の椅子を我々にすゝめてくれた。早速話し合ひに入る。アントニオはミラノで組織した数々のデモの写真を取出して一枚一枚を私に見せてはその状況を説明してくれる。柔かい栗色の毛があごを覆い眼鏡の奥の柔和な瞳が好もしかった。静かな口調でフランス語とイタリヤ語がチャンポンに飛出してくる。妻だと紹介されたリアーナは私の様に小柄な女性である。フランコが二人に「立って並んで見ろ」と云う。背比べなら公平にやらなくって私は履いていたかかとの高い靴をぬいでストッキングで床に立った。それでも私の方がいくらか高かった。オーツと一同歓声をあげて手をたたいた。黒髪のチェザレは鮮やかなブルーのブラウスにベージュ色のパンタロン姿でさしづめベニスゴンドラ漕ぎといった風貌である。我々と話を交している間も彼は殆んど新聞送りの作業の手を休めない。話をきくに従って彼等のその勤勉ぶりにも納得がいく。この新聞は月刊七千から一万一千部を発行しているが、その仕事に従事しているのは六名で、常時はミラノの三人が、あとは定期的にローマ、トリノ、ヴェネチアから仲間がやって来るのだそうだ。事務所にはしばらく坐っている間にも、若々しい活気のある

れた空気が感じられて、こちら迄鼓舞されるふんいきがあった。そこへアントニオの連絡を受けた新聞の編集責任者のパオロ・フィンチがやって来た。ミラノ大学の教授アメデオ・ベルトロも加わった。一同ワインで乾杯してレストランへと繰り出した。奥の大きなテーブルに我々は円になって坐った。英・仏語を堪能に話すパオロ・フィンチが主に話を進めた。だが飲む程に喰う程に、座はにぎわいリリアーナは夫のアントニオと日本へ行きたいと云い出し、私の方は君達が来るなら、好きならだけ私の家に泊つたらよい、そしてみんなで日本各地を旅行しよう等と吾ながら調子のよいことをしゃべっていた。少しはワインの酔いもあった。しかしそれ以上に素晴らしい仲間に出会った喜びが私をすっかり陶醉させていたのだ。フランコがおもしろおかしく話す我々の珍道中談は温好で物静かなタイプのアメデオを大いに笑わせることになった。そしてミラノ大学の学生だというパオロの若さと情熱が私を圧倒し魅了した。夜中すぎ、家々も戸を閉し、街にたむろしていた男達の姿もすっかり消えた。暗い通りで、我々は互いに固く抱き合って別れを惜しんだ。

パオロの車で深夜のミラノの街を疾走して我々がファプロ家に帰ると、ネグリジエ姿で寝室から出て来たおば

さんは、フランコを見るなり文句を云い出した。彼女は夕方には戻るといふフランコの言葉を信じて夕食を俱にすべく若い仲間達を集めて我々の帰りを心待ちしていたのだ。アルフレッドも午後にはここに姿を見せたのだという。フランコがおばさんをなだめている間に、パオロは、素早く私のベットを整えてくれた。みんなが去り私はベットに入ったが中々寝つかれなかった。その夜の感動が私を興奮させたままであった。更に、今度の旅を通じて最も魅力的な男性として私に映ったパオロとの出会いがその興奮を助長させている様であった。窓はすっかり明け放してあったが、暑かった。丁度、その夜はこの建物の下を走っている市電の路面工事をやっていた。しかし、つるはしの音は殆んど聞えず、工夫達のにぎやかな話声が何時迄もつづいていた。その中誰かが唄い出す。その声は深夜のミラノの空気をふるわせて遠く広く響いた。

翌朝、アルフレッドが現われた。我々の顔を見るなりこのミラノでどこか観たいものはないか自分が今から案内してやると云う。ではスカラ座を教えてくださいという私の提案で、四人そろって街へ出た。スカラ座はすぐだった。その前をすでに私は幾度か散歩していたが、只スカラ座はこの時シーズンオフでひっそりとしていてあまり

に何気なく建っていたのでそれが天下の音楽の殿堂スカ

ラ座とは気がつかなかったのである。その途中で、我々一人のヒッピー風の若者とすれ違った。若者はアルフレッドに何か小声で話した。アルフレッドは無造作にポケットから紙幣を出すと我々の見ている前でそれを若者にあたえた。何のことか分らなかつた。男が遠ざかると我々はアルフレッドに訳を尋ねた。つまりそのヒッピーは金をアルフレッドにねだつたのである。何故見もしらぬあの男に金をやったのかという我々の問いに彼は答えた。ヒッピーの生き方には、すくなくとも我々と共通した哲学を見出す事が出来る。そういつた若者達とは広く共闘し相互扶助をしなければならぬと思うからだ。フランスで我々に金を借りたアルフレッドである。その借主の目前で見しらぬ旅人に金をあたえるアルフレッド、私は又そこでも彼におどろかされた。けれどもそのおどろきは、アルフレッドの人物の大きさとその思想性のたしかさに対する尊敬の念へと変つていくのだった。ローマ銀行の大きな建物の前を通つた。そこはかつてアルフレッドが働いた銀行だった。彼はここもくびになつたのだ。カタリーニャとミラノの権威ある二つの大学の学位をもつアルフレッドである。その気になれば、『ミラノ

の甘い生活』は彼にとって容易なものであつた。彼はそ

れを自ら拒否したのである。

ファプロの部屋に帰つて来ると、フランコを囲んで若い仲間達が集つていた。一階下に住んでいる若いベガリ夫妻は私達を自分の部屋に招いてその話をテープにとつた。素晴らしい仲間だった。妻のジーナは豊艶な金髪美女で、ブルーの瞳に同系色のアイシャドーが映えて、はちきれん様な肉体系がまぶしかった。夫のアンジェロは彼女にふさわしい美男子であつた。ジーナはその夫を片時も離れたがらない様に見えた。座がにぎわつてたまたまアンジェロと私がふざけ合つたりしていると、私はそんなときジーナの自分にむけられる視線を感じるのだった。彼女は非常に情が深い様であつた。こんな美女にそれ程迄想われて、アンジェロは幸せだと当人はともかくも、まわりの我々には思えたものだ。

その夜おそく、我々はミラノを出発した。こんどはアルフレッドも一緒だった。市電ののりばでアウグスター家は我々を見送つてくれた。ゆっくりと遠ざかる我々の電車に、何時迄も手を振りつづけたアンジェロとジーナのびつたりとよりそつた姿が暗い街のひかりの中でいつまでも見えていた。

イオム5号。合評会の記

イオム5号の合評会は大阪の向井方で5月26日(日)午後ひらかれた。神戸での会合が続いているので、今回は大阪でということだったが、当主の向井氏は所用で旅行中とか、和歌山の河本さんには健康が勝れぬのか出席なく残念だった。二時過ぎにはほぼ出揃い一人合評を始める。

大正時代の大阪

河本 乾次

毎号欠かさず原稿を送ってこられる河本さんの力量は一同敬服させられる。今回は江西一三にからめつつ大正時代大阪での労働運動のようが綴られている。これは3号・4号と連載されている江西一三の伝記に触発されて書かれたわけだが、このように互に触発しつつ運動の軌跡が文章化され、豊穣にされてゆくことは有意義なことだ。

ブルードンへの視点

長谷川 進

ともなかつたろう。実り多い合評をやりたいたいものだし、そのためにもそうした作品を発表していかねばなるまい。

労働に関する断章・その一

日野 善太郎

相当意欲的な作品で、三〇五回にわたる予定とか。今回はその序論に当り、労働形態の変遷に準じた「労働者」概念の対象の拡大乃至内容の変遷、そして現在での混乱が明治以後そして戦後の日本社会の流れにそって述べられていて面白い。まず文体について「平明で非常にいい。こういう文章はなかなか書けないものだ。」と讃辞が出たが、「平明なのは良いとしても、冗長に過ぎるのではないか？」との反論もあった。次いで内容に入り、「オートメーション工場での綺麗で楽な仕事という現象を過大評価している。」といった批判や、「労働とその価値をどう扱っているのか？」等々の質問や意見が次々出された。皆意気込んでいたのだが、「それらについて述べたのでは、次の分の内容に入っていくことになるので、今度の合評会迄待ってくれ。」と肩すかしを喰ってしまった。それでは治まらないのか、「それじゃ次回にはこういうこと、ああいうことを論じて欲しい。」と筆者

この小文は長年アナキズム古典の翻訳を手がけられてきた筆者の手になるもので、これらの翻訳には既に親しんでいることもあってか内容についてはきざして問題とはならなかったが、その意義を廻って議論が沸騰した。

「現在スターリン批判は一般化しているが、レーニン批判迄には至っていない。ソビエト体制の根源をレーニン時代に遡って追求するよう打出している点で今日的である。」

「いや、ここで言われていることはアナキストにとっては既に一般的了解事項であって、そこから先の具体的な方法論・組織論の展開こそが今日的課題なのだ。」

「いや、だからそうした課題こそが思弁的ではなくソビエト革命・スペイン革命などの歴史的経験の検討を通じて追求されるべきなんだ。」等々。

「一寸した論調の違いでも大きな議論となるとところがイオムらしい。」との評言もあったが、これにはたとえばアナキズムとしての具体的な展望といった今日的なものの理論的なものをさして掲載し得ないでいるイオムの現状が反映しているように思う。もっと魅力的な作品が掲載されていたなら、意義を廻って議論を闘わすというこ

に色々注文をつけることになった。次回が待速しい。

まぼろしの新聞ゼネスト

和田 栄太郎

筆者自ら参加した大正八年夏東京での新聞ゼネストのもよう・その母胎となった革進会正進会のことなどが描かれている。特に結成されて間もない、しかも親睦会・共済組合といった性格であった革進会が外部からのさしたる援助もなく各社毎の分散的形態でそうした新聞ゼネストを闘ったこと、そこでの労働者の生々としたありさまは今日の労働組合からは想像し難いものであり、改めて労働者の自発性・連帯の力強さに目を覚された。「未定稿では色々逸話が挿入されていてよかった。客観的なまとまったものにといいことで削除したのだろうか、せっかくの当事者の手になる記録としては残念だ。」との意見があった。

九時半散会となる。途中降出し、夕刻には雷を伴った雨もいつかやんでおり、雨上りの道を帰途についた。